

企業訪問

# 男女共同参画社会を職場から

## 先生は『保育園のお父さん』！

清水一哉 さん（稲保育園 保育士）

保育園や保育所に通う子どもたちがみんな大好きな保育士さん。昔は「保母さん」という呼び名が一般的でしたが、今は男性の方も多く活躍されています。今回は、市内の保育園でご活躍されている男性保育士さん取材し、充実した日々のお仕事についてお聞きしました。

### 最初の一年は無我夢中

清水一哉さん（26歳）は、保育士になられて5年目、平成22年4月より、稲保育園で年長児クラスを担当しています。

清水さんご自身が幼稚園時代に男性保育士に教わり、その先生がいつも笑顔だったことや、一緒にドッジボールをしたことなどが強く記憶に残りました。その後、中学校の職場体験学習で園児とのふれあいを楽しんだ頃



から、徐々に保育士志望の気持ち固まっていたそうです。

そして夢を叶えた清水さん。男性の少ない職場であることは重々承知。とはいえ、当初は女性先輩方に囲まれ、相当気を使われたようです。「僕は元々上がり性で、人前に立つことが苦手な方なんです。」保護者との接し方もよく分からず、戸惑うことが多かったようです。「最初の一年は無我夢中で、まったく余裕がなかったですね。」

休日に男性保育士の友人と会うと、それぞれ同じような環境で仕事をしているので、悩みも同じ。自分だけが大変なのではないと感じ、救われたそうです。唯一の男性職員である先生に對する園児たちの反応はというと、やはり珍しいと感じていた

### 園児の成長に喜びを感じて

清水先生が保育士になって一番嬉しいことは、「日々園児たちの成長を見られること」だそうです。「4月に全然できなかったことが何ヶ月かすると簡単にできるようになっていて、それを発見したときは本当に嬉しくて、涙ぐんでしまうこともあるんです。思い切り誉めてあげます。」

先生はスポーツ好き、学生時代からずっとテニスをしていらっしやるそうです。足の速さも評判ですが、園児たちとのかけつ

こでも手は抜かないそうです。「追い付こうとするその向上心を大事にしたいと思います。」また、先生は園児たちのために新しい遊びを考えるのもお好きだそうです。友だち作りの一環として考案した名刺獲得ゲーム、ボールを転がしてよけるゲームや鬼ごっこを変形したゲーム等々。「子どもたちから『先生、あれまたやろうよ！』と言われると本当に嬉しいです。」

### 五年目の自信

園のお父さん」です。保育士になられて5年の月日が過ぎ、かつて悩みのタネ？だった女性保育士の皆さんとの関係や保護者の方々への対応については、「経験を重ねる毎に自信が湧き、今では自分自身の意見も言えるようになりました。」

また、職場にはじめての後輩もできました。「何でも聞いてほしいし、自分で考えてほしいと思います。」ときびしい優しさをのぞかせるところが、真摯で誠実な清水先生らしいのではないのでしょうか？

今、苦難の時代にある日本にも、未来に明るい光をともしてくれる若者は数多くいるはずで「ずっと保育士でいたい」飾

## 『高齢者』って何歳から？



高齢者とは、何歳以上の人の

のでしょうか。国連世界保健機構（WHO）は65歳以上と定義していますが、日本の法律上は各法律によってその定義は異なり、一般的には何歳以上の者を指すのか、決められていません。

内閣府の「高齢者の日常生活に関する意識調査」（全国の60歳以上の男女5千人の調査）によると、『一般的に高齢者とは何才以上だと思いませんか？』という問いに対する回答は、

70歳以上 — 42%（減少傾向）  
75才以上 — 27%（増加傾向）  
と、実に7割近い方が「高齢者とは70代以上だ」と感じられています。まして、年々その年齢は上

昇しており、WHOの定義との開きはだんだん拡大してきています。

また、同じ調査では、将来の自分の日常生活全般への不安についての質問もありました。

まず経済状況への不安で見ると、実に9割もの人が家計に不安や心配を抱えていました。確かに、高齢者の場合、多くの人の主な収入源は公的年金です。年金はこの先不透明なところがありますし、高齢者の就業機会も少ない事からすると、今後所得の増加が見込めず、ずっと経済的に厳しい状況が続くことになりかねません。

次に、健康について見てみると、今現在健康な人でも、70%前後の

人が不安を感じていました。その内容で突出しているのが、自分や配偶者の健康、将来の寝たきりや介護のことであることが明らかです。

身体能力が低下し日常生活に支障が出ると、買い物などの外出が不便になるほか、友達とも会いづらくなってしまいます。その結果、家に閉じこもりがちになって意欲や自信を失い、どんどん孤独になってしまいます。

そんな高齢者にとって、近所や友人とのつながりを保ち、いざというとき頼れる人がいることは、とても重要です。

ですが、地域を調べてみると、例えば「高齢者クラブ」。自分が高齢者だと思っていない人が多

いから、なかなか参加する人が増えません。各地域の「自治会」も年々加入率が低下しています。これらは、つながりを保つ観点からも、何とか維持していかな

### 支えつくれる若さ

そんなことを考えていたある日、茨城県立取手第二高等学校の家政科の七人の皆さんにお話を伺いました。

くはならない重要な課題です。どんどん増えつつある、経済的にも健康的にも不安を抱えた高齢者が、家庭関係も地域のつながりも、希薄になってきているなかで、見えないところで増大するであろう不安や困難をどうやって周りに伝えていくか、頼れる人につなげられるか。大問題です。

校外学習で、市内の福祉施設「緑寿荘」「つじ園」「ふれあいの郷」3カ所での実習を経験した皆さん。福祉について勉強したい人、手話を学びたい人、将来に役

立たい人、その目的は様々です。実習の内容は、体操や移動の介助・入浴後の介助・飲み物や食事の配膳・食事の介助・お話し相手・お散歩への付き添いなど盛りだくさんです。

なかなか大変で苦労も多かったようですが、皆さんが実習で嬉しかった事は、「最初は、どう話したら良いかとまどったが、その内に打ち解けて利用者の方と楽しく話が出来た事」や、「百二歳のおばあさんから頑張つてと逆に励まされた事」、「ありがたう、という一言」などだそうです。皆さんとて

もいい経験をされたようでした。会話の難しさや、声かけの大切さも学び、将来は福祉の仕事

を目指すそうです。

こうした若い方々が増えてくれば、福祉の仕事も変わってくるのではないかと感じました。今回取材した取手二高の皆さんのような方が、これからの高齢化社会、ひいては日本を支えていくってくれるのだと思います。嬉しい報告です。ありがとうございました。（内藤）



福祉施設への実習を体験された取手二高家政科の皆さん

### 編集後記

編集に携わって8年を経過しましたが、原稿を書くのが相変わらず苦手です。全く進歩なし。しかし、本来なら考えもしなかったテーマに触れるのはちょっぴり刺激的かも……。いわゆる高齢者としては、刺激が若さを保つ一番の妙薬。高齢者の記事を書いたその夜に、50年後は人口3割減で8700万人弱に。一方高齢者は3460万人強に、とのニュース。超刺激的！（内藤）

この情報誌は、男女共同参画にむけた基礎作りの一環として、市民活動団体が主となり創刊（平成7年）。誌名は「風」と命名し、東京藝術大学院生（当時）がデザイン。地域社会のなかに男女共生のしなやかな風を入れる情報誌となることをめざしています。

発行日 平成24年3月1日  
編集発行 取手市 秘書課  
編集協力員 内藤義彦／平塚恒夫  
下園淳子／沼田久美  
〒302-8585 取手市寺田5139  
TEL 0297-74-2141  
FAX 0297-73-5995  
H・P <http://www.city.toride.tokai.jp/>  
Eメール [hsho@city.toride.tokai.jp/](mailto:hsho@city.toride.tokai.jp/)  
表紙絵 有本 唯